相手の母語からはじめる、体温を感じる国際交流

中島 緑郎

現在の勤務校等
北海道芽室町立芽室南小学校

在外での勤務校／帰国年月
ヨハネスブルグ日本人学校／ 2012 年帰国

世界各地からきている JICA 研修員を 10 名程度迎え、各学年・学級に分かれて小人数で交流をおこなった。異文化交流の目的は国の違いを知ることではなく、こんなに違っても同じ人間だということを実感することである。そのためにあえて英語ではなく相手の母語と「体温を感じる距離」の交流にこだわった。

実践・活動の内容

大樹小のある北海道大樹町から近い帯広市には JICA 研修拠点があり、世界各地から研修員が集まっている。JICA の学校訪問制度を活用して、その研修員を学校に招いて交流を実施した。JICA 学校訪問は多くの場合 1 名か 2 名で、全校集会での講演と型どおりの質疑応答であるが、それでは式典であり国際交流にならないと考えたので、本実践ではなるべく多くの研修員派遣を希望し、全校交流に続いて研修員を各学級に振り分けて交流時間をとった。

当日参加する研修員のメンバーが決まると、その国籍を教えてもらった。5・6 年生が国ごとに調べて模造紙にまとめ、当日はそれを体育館の壁に貼りだした。ほかの学年でも、そのクラスに来る予定の研修員の出身国について調べ学習をおこなった。また、自己紹介用の名刺を作り、質問を英語でまとめた。

訪問予定の研修員とは事前に顔合わせをし、自宅にも招いてコミュニケーションをとった。「訪問先には中島がいる」と安心してもらう材料になったと思う。可能なら民族衣装を着用してほしいとも要望した。研修員には自分の母語の「Hello, Thank you, 1 ～ 10 までの数字の読み方」を提出してもらい、当日の全校交流のアイスブレイクの時にクイズの題材に使った。

朝研修員を迎えてまず全校交流。体育館の壁には、児童が調べ学習で作成した各国についてのポスターが掲示されている。JICA 紹介や大樹小 6 年生の英語による大樹小紹介につづいて、「研修員自己紹介クイズ」を実施。まず国名を言わずに自己紹介をしてもらい、「この人の国では、1 から 10 までの数字を●●、●●…と発音します。さてこの人はどこから来た人でしょう？」とクイズを出す。児童は自分が推測した国のポスター前に移動して待ち、研修員が自分の国のポスターに歩み寄ってそこに集まっている児童とハイタッチをする。単に挙手してクイズに答えるのではなく、ポスター前に歩いて移動するという動作を取り入れたことで場の雰囲気が明るくなり、自然に盛り上がった。これを研修員全員分繰り返した。

その後、休憩をはさんで各学年・学級で 55 分間交流した。研修員と学級のマッチングにあたっては、その学年の他教科の学習との関連などから、事前に「民族楽器を学ぶので●●国の人がよい」などの希望をとるようにした。学級で昼食を一緒にとって、昼休みにさよならセレモニーとして「We are the world」を一緒に歌って終了。児童は教室の窓などから見送った。

平成 27 年 8 月 17 日
外国語活動担当：中島

JICA 研修員学校訪問実施計画（案）

1、名　称　　JICA 研修員学校訪問
『小学校理科教育の質的向上（「教えと学び」の現場教育）』コース研修員

2、目　的
・多種多様な文化に直接触れることで、広い世界の存在を感じとり、進んで新しいものや未知のものに積極的にかかわろうとする態度を育てる。（全学年）
・体温を伴う生の交流を通じて、世界の人々との違い・共通点について考え、差別や偏見のない社会を築くために自分はどう生きるべきか考える機会とする。（高学年）
・外国語活動で学んだ英語によるコミュニケーションを実践し、学習意義を理解する。（高学年）
※児童には、『遠い異国に来てがんばる外国の人に、日本での楽しい思い出を作って喜ばせてあげよう』という思いやりや、自分たちの行動や実績が社会貢献・国際貢献に役立つ尊いものであるという視点を与えて、活動の動機づけとしていただけるとよいと考えます。

3、期　日　　平成 27 年 11 月 27 日（金）

4、日　程

時　程	時間	場　所	概　容	備　考
～9:00			研修員到着	会議室を控室とする。
9:00～ 9:15	15 分	校長室・校舎	挨拶・見学	学校長・中島で対応
9:30～11:10	90 分	体育館	歓迎式・全校交流	10 分の休憩はさむ
11:10～11:20	10 分		休憩・移動	
11:20～12:15	45 分	各学年教室	学級交流	
12:15～12:50	35 分	〃	交流学級で給食	
13:05～13:25	20 分	体育館	さよならセレモニー	児童は自由参加
13:30			学校出発	児童は見送り

5、内　容
（1）事前学習の例（時数・教科・内容は学級で調整）
《1～4 年生》
生活科または学活：研修員の出身国について学ぶ。
《5 年生》
総合学習：学級に入る研修員の出身国について概要を調べておく。現地語での挨拶や国旗など。
学級交流でのアクティビティーを計画する。
外国語活動：挨拶と自分の名前を英語で紹介できるよう練習する。
名前や好きなスポーツを書いた自己紹介名刺を作る。
《6 年生》
総合学習：研修員の国について調べる。
時数に余裕があれば、班ごとに分野を決めて調べ模造紙にまとめる。
学級交流でのアクティビティーを計画する。
外国語活動：英語での自己紹介を練習する。（名前、好きなものなど）

英語を使った名刺と名札を作る。
既習の文型を利用して、聞きたいことを英語の質問にまとめる。
（2）当日の流れ

	内　　容
9:00	**学校到着**
9:00～9:15	**校長より挨拶、校内見学**
9:30～10:15	**歓迎式・全校交流（前半 45 分・後半 45 分）** 準備・進行：中島
2 分	① 学校長挨拶
1 分	② 歓迎の言葉（後期児童会長：　未定　）
2 分	③ JICA の活動について（JICA 職員より）
5 分	④ 英語で大樹小紹介（5・6 年生より）→プロジェクター、PC
35 分	⑤ アイスブレイク『研修員自己紹介クイズ』
	・まず自己紹介を聞く。※出身国名は言わないでもらう。
	・一つずつ挙がる国名を聞き、各研修員がどの国の人か推測する。
	・挙げられた国名の出身と思う研修員のまわりに集まり、ハイタッチする。
	・同じ流れで全員を紹介する。
	全研修員分行う
	【休憩 10 分】
10:25～11:10	
40 分	⑥ 国の様子紹介
	・研修員より、出身国について簡単に紹介してもらう。（通訳は JICA 職員）
	→プロジェクター、スクリーン、PC
2 分	⑦ 歓迎の歌（全校合唱 2 曲『あの青い空のように』『2 学期の歌』）→伴奏指導必要
3 分	※時間があれば最後に全校児童と記念撮影する。（撮影全般を大地さんに依頼）
	【休憩 10 分】
11:20～12:15 学級交流(55 分)	**各学年・学級での交流（55 分）**　※内容は各学年に一任。決まり次第 JICA に連絡。
	…例えば
	・児童が英語で自己紹介し、名刺を交換する。
	・学級で企画したアクティビティー(簡単なゲームなど)で交流する。
	・日本の手遊び歌(茶つみ、せっせっせ等)を教えて楽しむ。
	・自分たちが調べた中で、研修員の出身国についてわからないことを聞く。…等々
	※学年の実態に応じて『ふれあい』が体験できれば十分です。
12:15～12:50 昼食	**昼食**
	各学級で一緒に給食。
	※宗教的な理由などで食べられない場合もあるかもしれませんが、教室で児童とともに食卓についてもらうようにお願いしています。
	※12:50～13:05 は児童が清掃活動をします。研修員さんは休憩や見学など自由に過ごしてもらいます。
13:05～13:25 昼休み	**昼休み・さよならセレモニー**
	※昨年の反省から、集まれる児童で簡単なセレモニーを行って区切りとします。
	高学年中心に外国語活動で取り組んだ英語の歌(多分 We are the world 等)を一緒に歌って最後に研修員さん代表から一言挨拶をもらって終了。
13:30 学校出発	**研修員出発**
	児童は教室の窓などから見送りします。見送り後は通常の 5 校時授業に入ります。

JICA 研修員学校訪問実施計画（案）より、当日の流れ

Name：PRABHU SELVARAJ　プラブー セルバラジ
Country：INDIA　インド
Local language：TAMIL　タミール語

☆Please write down how do you say "Hello" and "Thank you", how to count the numbers in your language!

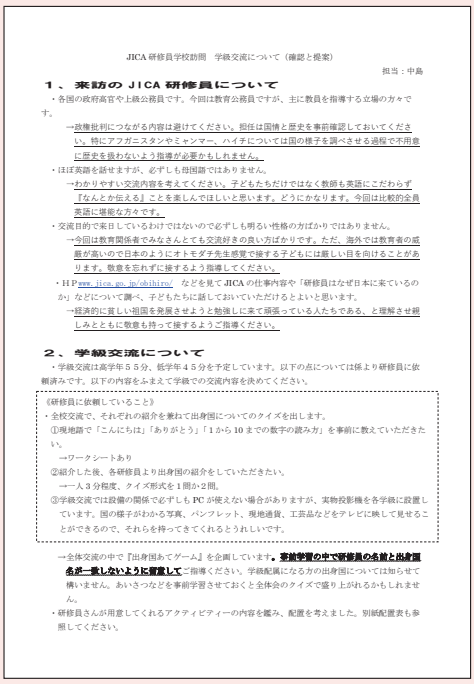
Hello：VANAKKAM　バナカム
Thank you：NANDRI　ナンドリー
1：ONNU　オンヌ
2：~~TWO~~ RENDU　レンドゥ
3：MOONU　ムーヌ
4：NAALU　ナーリル
5：IYINDHU　イインドゥ
6：AARU　アール
7：AELU　イエル
8：AETTU　エートゥ
9：ONEBATHU　ウンバトゥ
10：PATHU　パトゥ

Thank you for your cooperation!　A·RI·GA·TO!

事前調査用のシート

評価と課題

各学級での交流の内容は担任に一任したのだが、何をしてよいのかわからないと困惑する教員や、逆に当日の動きをシミュレーションして何から何まで万全に準備しようとする教員もいた。私自身は予定通りにはいかないハプニングも交流のうちだと考えていたが、こうした不安を抱く教員向けに「確認と提案」を用意した。内容は、JICA 研修員は諸外国の政府関係者や公務員であること、政権批判は控えること、基本的に英語が使えること、交流目的で来日しているわけではないのでコミュニケーションに長けた人ばかりではないことなどの注意点と、学級交流の取り組みの具体例である。また、「学年の実態に応じて触れ合いが体験できれば良い」「先生がつたない英語で何かを伝えようとすること、その姿を見せること自体が国際理解教育」と訴え、「どうにかなります」と書き添えた。



JICA 研修員学校訪問　学級交流について（確認と提案）

担当：中島

1、来訪の JICA 研修員について

・各国の政府高官や上級公務員です。今回は教育公務員ですが、主に教員を指導する立場の方々です。

→政権批判につながる内容は避けてください。担任は国情と歴史を事前確認しておいてください。特にアフガニスタンやミャンマー、ハイチについては国の様子を調べさせる過程で不用意に歴史を扱わないよう指導が必要かもしれません。

・ほぼ英語を話せますが、必ずしも母国語ではありません。

→わかりやすい交流内容を考えてください。子どもたちだけではなく教師も英語にこだわらず『なんとか伝える』ことを楽しんでほしいと思います。どうにかなります。今回は比較的全員英語に堪能な方々です。

・交流目的で来日しているわけではないので必ずしも明るい性格の方ばかりではありません。

→今回は教育関係者でみなさんとても交流好きの良い方ばかりです。ただ、海外では教育者の威厳が高いので日本のようにオトモダチ先生感覚で接する子どもには厳しい目を向けることがあります。敬意を忘れずに接するよう指導してください。

・ＨＰwww._jica._go._jp/obihiro/　などを見て JICA の仕事内容や「研修員はなぜ日本に来ているのか」などについて調べ、子どもたちに話しておいていただけるとよいと思います。

→経済的に貧しい祖国を発展させようと勉強しに来て頑張っている人たちである、と理解させ親しみとともに敬意も持って接するようご指導ください。

2、学級交流について

・学級交流は高学年５５分、低学年４５分を予定しています。以下の点については係より研修員に依頼済みです。以下の内容をふまえて学級での交流内容を決めてください。

《研修員に依頼していること》

・全校交流で、それぞれの紹介を兼ねて出身国についてのクイズを出します。

①現地語で「こんにちは」「ありがとう」「１から 10 までの数字の読み方」を事前に教えていただきたい。

→ワークシートあり

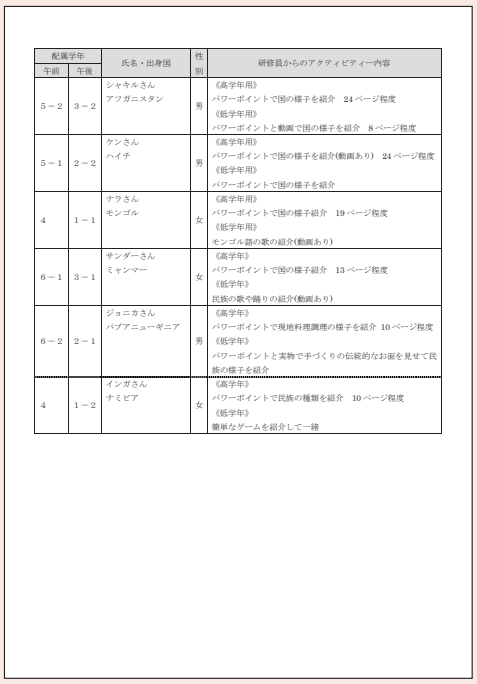
②紹介した後、各研修員より出身国の紹介をしていただきたい。

→一人３分程度、クイズ形式を１問か２問。

③学級交流では設備の関係で必ずしも PC が使えない場合がありますが、実物投影機を各学級に設置しています。国の様子がわかる写真、パンフレット、現地通貨、工芸品などをテレビに映して見せることができるので、それらを持ってきてくれるとうれしいです。

→全体交流の中で『出身国あてゲーム』を企画しています。**事前学習の中で研修員の名前と出身国名が一致しないように留意して**ご指導ください。学級配属になる方の出身国については知らせて構いません。あいさつなどを事前学習させておくと全体会のクイズで盛り上がれるかもしれません。

・研修員さんが用意してくれるアクティビティーの内容を鑑み、配置を考えました。別紙配置表も参照してください。



配属学年 午前	配属学年 午後	氏名・出身国	性別	研修員からのアクティビティー内容
５－２	３－２	シャキルさん アフガニスタン	男	《高学年用》 パワーポイントで国の様子を紹介　24 ページ程度 《低学年用》 パワーポイントと動画で国の様子を紹介　8 ページ程度
５－１	２－２	ケンさん ハイチ	男	《高学年用》 パワーポイントで国の様子を紹介(動画あり)　24 ページ程度 《低学年用》 パワーポイントで国の様子を紹介
4	１－１	ナラさん モンゴル	女	《高学年用》 パワーポイントで国の様子紹介　19 ページ程度 《低学年用》 モンゴル語の歌の紹介(動画あり)
６－１	３－１	サンダーさん ミャンマー	女	《高学年》 パワーポイントで国の様子紹介　13 ページ程度 《低学年》 民族の歌や踊りの紹介(動画あり)
６－２	２－１	ジョニカさん パプアニューギニア	男	《高学年》 パワーポイントで現地料理調理の様子を紹介 10 ページ程度 《低学年》 パワーポイントと実物で手づくりの伝統的なお面を見せて民族の様子を紹介
4	１－２	インガさん ナミビア	女	《高学年》 パワーポイントで民族の種類を紹介　10 ページ程度 《低学年》 簡単なゲームを紹介して一緒

教員向けの資料「確認と提案」

ハイチ出身ケンさんとの交流のようす

ハイチ出身のケンさんと交流した５年１組の学級通信に掲載された児童の感想文の一部を抜粋する。

「国は違っても、笑顔でいれば心が通じることがわかった」
「私たちの言葉を理解しようとしてくれてうれしかった」
「生きたくても生きられない人がいる」
「勉強できる日本の子どもは幸せ」
「ケンさんの言葉を聞いて将来人を助けたいと思った」
「ハイチやほかの国が平和であってほしい」

交流事業において、共通語である英語ではなく研修生の現地の言葉をあえて使ったのは、現地の言葉でのあいさつは、たとえつたなくても相手の心を開かせる効果があることを、私自身がヨハネスブルグ日本人学校（南アフリカ）赴任中に現地で何度も経験していたからである。

異文化を知ったとき、自分たちの文化とはここが違うとか珍しい面白いという発見だけでとどまってしまうことが多い。しかし違いを知ることは目的ではなく、互いにわかりあうための入り口でしかない。その先には「こんなに違うけれども人間として大事にすることは同じ」という気づきがある。児童にはぜひそこまで到達してほしいし、そのための肌を触れ合う体験であり、その人の母語での交流である。交流のコツは、肌を触れ合うこと、その人の言語で話しかけること、一緒に体を動かすことだと考えている。

大樹小における JICA 交流事業は、大雪で開催が危ぶまれた年もあったが、在任中に 4 回実施できた。その後私が転任したため、現在は継続していない。

開催にあたっては様々な準備が必要で、時間的には、学級担任を持っていたら難しかったかもしれない。また、自分のやり方を押し通して、もし失敗したときに責任をとれるのかと、自問自答することもあった。

この実践について報告すると「（海外経験のない）他の人にはできない」と言われることがある。誉め言葉とありがたく受け取っているが、反面、学校行事の実施の可否が、個人の能力や意欲に依存してよいわけではないとも思う。

実践に至った経緯と提言

2009 年度から勤務したヨハネスブルグ日本人学校にはトラブル防止の観点から「現地スタッフと親しくしてはいけない」などの不文律があった。それに違和感を持ち、積極的に彼らと触れ合った。まずは学校行事で日本人学校の子どもたちと一緒に歌を披露してもらって交流。それがきっかけになって、スラム街として知られていたソウェトにある教会のクワイア（合唱団）に家族で参加するようになった。このとき、人々が飛び込みの外国人である自分たちを、懐深く、自然に受け入れてくれたことが強く印象に残った。

クワイヤの歌声に感動したことから、日本人学校の芸術鑑賞会に彼らを招いて演奏会を実施、最後は児童生徒も保護者も大合唱という大成功をおさめた。その後、現地理解の取り組みをさらに進め、現地孤児院との定期的な交流事業も実現することができた。

前例を破って積極的に活動した背景には、「せっかく海外に赴任したのだからここでしかできないことをしたい」「自分の子どもを含む子どもたちの前で、自分が信じていることを推し進める姿を見せたい」という強い想いがあった。また日本人学校の先生方が共感

してくれ、力を貸してくれたことが大きかった。

2012 年の帰国後に着任したのは、学校力向上特別指定校の大樹町立大樹小学校だった。担任を持たない立場だったので、在外校から帰任した自分の役割は国際理解教育と考え、管理職の応援を得て交流事業の実現に注力した。

大樹町内に外国人はもともと少なく、いてもすでに長期間住んでいて日本になじんでいる人だった。国際理解教育だから、なるべく日本の事情に通じていない人、日本語もできない人、つまり自分たちを理解していない人と交流することに意味があると考えた。帯広市の JICA に研修員の学校訪問制度があることを知って、これを国際理解教育に活用しようと発案した。JICA への申請では、南アフリカで現地に飛び込んで多くの友人を得た経験から学んだことをアピールした。

大樹小から転任した芽室南小では、現在小６の担任をしている。学級の子どもたちには、折に触れて自分がアフリカで見聞したことを話し、海外のニュースがあればそれを取り上げて「この国には先生の友達がいるんだ」などと話している。また、外国語ジャンケンや様々な国・民族の言葉でのあいさつなど、日常生活のなかに折に触れて「世界」を取り入れている。

数年前は人間関係のトラブルもあった学級だったが、昨年度から学級スローガン「今、きみから広がる世界平和」を掲げた。世界平和の第一歩は学級がわかり合うことで、隣の子を受け入れられなければ世界平和は実現しないと言い続けた結果、現在は男女問わずとても仲が良い学級になっている。

小学校最後となる発表会は、児童によるオリジナル劇だった。いじめのあるクラスの子どもたちが、「戦争反対＝非国民」と言われた戦争中の日本や、アイヌ民族と和人の融和に尽力した鈴木銃太郎の生きた開拓期の郷土、そしてネルソン・マンデラ大統領が憎しみを超えて国を建て直した 30 年前の南アフリカの様子に触れて、自分たちを見つめ直す。「わかりあう努力をすることで心が変わる」がテーマになっている。

オリジナル劇「World Peace, like a Rainbow」の１シーン

16 人の児童が作ったシナリオは私の予想をはるかに超える深い仕上がりで、タイトルは「World Peace, like a Rainbow」。問い続けてきた「人間として何を大切にしなくてはいけないか」という本質を、子どもたちがしっかり受け取ってくれた、差別や排除を目にしたときに自分事として捉えることができる視点を得てくれたと感じている。国際理解

は学級経営の根幹にもなりうる。在外経験を帰国後に生かすということは、こういう子どもたちを増やすための「何か」に携わることである。そういう意識を持てば、活かす場面はいくらでもあることを実感した。

しかし残念ながら、国際理解教育ができることは、「バスケットボールの指導ができる」、「楽器演奏が指導できる」などのような、教員として評価されるスキルにはなっていない。いつか国際理解教育が、教員の評価軸の一つになってほしいと考えている。また、国際理解教育についてもっと語り合える場があれば情報交換ができて良いと思うが、現状はなかなかその機会はない。

国際理解の第一歩は「自分から声をかけたら仲良くなれる」という可能性を信じること。このことを繰り返し、様々な局面で、直接的･間接的に様々な方法で伝えていくうちに、それはいつしか、子どもたちの生きる信念となっていくと思う。それを伝え続けることが、海外で得難い経験をした自分の責務だと考えている。